

サラリーマンよ、 自ら感動を求めよ

仕事をしてきた中で「忘れられない思い出」というのは数々ありますが、最近またひとつ「忘れられない思い出」が増えました。

関経連をはじめ、各方面からのお力添えをいただき、当社では、2008年度の開業をめぐして中之島新線の建設工事を行っています。その一環で、この4月16日に天満橋駅で線路の切り替え工事を実施しました。この工事は中之島新線の線路を敷設するスペースを作るため、今ある線路の一部を数メートルずらし、淀屋橋へ通じる線路とつなぐというものでした。社長である私は「金のボルト締め」という、線路をつないだ後に金のボルトを締めるセレモニーに出ることは以前から決まっていました。しかし、思い出や感動は自分で作るものだと思っている私は、「おもしろそうだ」と感じたらどんどん出かけていく主義。そんな儀式よりも作業員のみなどと一緒に線路の切り替え工事をどうしてもやりたいと実際に工事に参加しました。

工事は終電が通った後から始めるため、16日午前零時に天満橋駅に私を含め作業員が集合しました。ご存じない方が多いでしょうが、線路をずらす作業は手作業で行います。30人くらいの作業員がずらっと線路に沿って並び、各自が20kgくらいあるバールを持って、それをバラスに突っ込みながら、てこの原理で線路を寄せていくのです。私はみんなと一緒にこれがやりたくて仕方なかったんです。現場のみんなも私の参加を喜んでくれて、士気があがりましたね。「エイサー、エイサー」と30人が力を合わせて線路を寄せていくさまは、それは感動的なシーンでしたよ。

線路を寄せたら次はレールをつなぐ作業です。長めになっている双方のレールを切断してつなぐのです。私もまさに“切ってつなぐ”部分の作業に参加しました。この作業、左右のレールの長さが違うとやり直しとな



佐藤 茂雄氏

Shigetaka Sato

京阪電気鉄道社長

り、その間全員がバールでレールを持っておかなければならないという大変な作業です。私が参加したときもやり直しになり、私の隣にいた本職の班長に「社長、我慢しておくれやっしゃ」と声を掛けられ、みんなとともにバールでレールを持ち続けました。こんな力仕事ができる体力があるのも、学生時代にボート部で身体を鍛えていたおかげだなと思いましたね。こうして軌道を引いた後には電気系統の作業にとりかかります。始発の時刻までに工事を完了できるか、時間との戦いでした。めでたく16日の始発に間に合わせることができたときは全員の心に達成感が生まれました。作業後の打ち上げで工事をやり終えた仲間と飲んだお酒のおいしかったこと。感動をみんなで味わうというのはすばらしいことです。これから開業する中之島新線の重要な工事を、身を持って体験したというこの貴重な経験は、新たな「忘れられない思い出」です。

記憶に残る思い出、感動というのはサラリーマンにとっても本当に大切です。自ら求めなくても、運良くそういう機会を与えられることもあるかもしれません。しかし、今回中之島新線の切り替え工事で私がみんなの中に入って一緒に作業することを志願したように、自ら飛び込んで行って思い出を作る、感動を味わうということをサラリーマンは絶対にするべきです。そうすれば自分の人生が楽しくなります。そして、自分の人生を楽しみながら、熱心に仕事をする社員が多い会社は絶対に良くなっていくはずですよ。

談